

タイトル：2019年度 教育セミナー（第15回）

日時：2019年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

高倉 駿（筑波大学大学院人文社会科学研究科国際地域研究専攻2年）

2019年の9月19日から22日にかけて東京外国語大学にて行われた中東☆イスラーム教育セミナーに参加した。8月初頭にウズベキスタンへの留学から帰ったばかりの私には、このセミナーはとても新鮮に感じた。セミナーには様々な分野・地域を研究対象とする学生や研究者が多く参加しており、一番の驚きは、中東・イスラームというテーマに関わる研究を行っている近い年代の学生がこれほど多く集まっているということであった。

セミナーの講義の中で特に関心を持ったものは、近藤信彰先生のハムザ物語に関する講義、飯塚正人先生のイスラーム地域研究の枠組みそのものに関する講義、そして新井和広先生の南アラビアと東南アジアの聖者信仰に関する講義である。講義で扱われていた個別具体的な歴史・社会事象そのものも興味深かったが、それ以上にどのようにこれらの事象を問いと結びつけることができるかという点が非常に参考になった。ある物語や伝説がどのように伝播していったか、また各社会でどのように受容されたかについての議論は非常に面白かった。加えて、それらの物語や伝説が特定の社会の中でどのように正統性を獲得し得たか、あるいはし得なかったという点を、近代の民族や国民国家の形成の文脈の中で論じていた部分は、叙述史料を扱う自分の研究においても参考にすべきであると思う。

学生の発表は、3人とも歴史学の分野のもので、私の専門からすると非常に興味深かった。それぞれの発表でも史料を熱心に読んでまとめた様子が伺え、また、発表の機会を活用して積極的に発信しようとしている彼らの姿勢に、同年代の学生として学ぶべきところが多かった。

私は、中東・イスラームという枠組みから見れば、その境界にあるとも言える中央アジアの歴史を学んでいる。宗教に関わる問題や「近代化」の問題を一つとってみても、中央アジアと他地域とは全く異なる様相を持つことを、それぞれの研究発表を聴きそれについて議論を行う中で実感を伴って認識できた。こうした地域や枠組みを真正面から扱う、あるいは問い直すような議論に4日間じっくりと参加することができたことは、自分の研究を考えていく上で大きな助けになった。

さらに、今回のセミナーで学べた一番大きなことは、分析概念や所与の概念を先行研究と突き合わせて十分に吟味し、かつ研究において統一した定義や認識をはっきりと示すこ

とである。受講者の発表の中でたびたび概念について質問や意見が出ており、体を張って見本を示してくれた発表者各位に感謝を示すとともに、今後の研究においてこの教訓を生かすつもりである。

今回一つ心残りであったのは、ポスター発表を含めて発表をしなかったことである。自身の研究テーマと問いが十分に練られていない段階では発表は難しいと考えたためであったが、参加者のポスター発表などを見る中で個々の研究の問いについてそれぞれの分野の専門家から意見をもらえるというのは滅多にない機会であり、非常にもったいなかった。

最後になりましたが、このような機会を設けてくださった関係者の皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。